

大隈伯閣下明治廿二年六月東京神  
戸間ノ鐵道全通ヲ告タリ此線路ハ明治  
ノ初年皇國人民中鐵道思想ヲ懷  
クモノ曾テ一人モ無之ト可申時代ト於テ早  
ク西京ヲ通シテ神戸ニ達シ敷賀ニ岐スル  
鐵道ヲ設立スヘシト廟々算ヲ立テラタルモ  
ノ、今ヤ其功ヲ奏セシナリ之ニ附帶シテ直江  
津武營橫須賀等ノ諸線アリ今マ官  
設既成線路ヲ共計スレハ五百四十哩ノ  
成功ニ及ヒタリ此鐵道ニ依テ享受スル國  
家ノ福利ハ蓋シ算數ノ及フ所ニアラサル  
ニ此大ノ福利ヲ國家ニ與ヘタルモノハ



當初物議ヲ排シ勇往新行其規諫ヲ  
確立セラレタル廟堂ノ功臣ニ歸セサルヲ  
其人ハ誰ナルヤ早已ニ御記臆ニ存セサルモ  
知ル可ラスト雖モ明治五年ノ九月東京  
横濱間開業ノ後ニ於テ忝クモ錢道創  
建ノ際首トシテ物議ヲ排シ意見ヲ確守シ  
終ニ今日ノ成功ニ及タル段 睿感不淺  
昔々以テ賞賜ヲ接受セラレタルハ閣下ト  
伊藤伯トニアラスヤ嗚呼二十年ノ昔閣  
下等ノ此先見アリテ此宏謨ヲ立ルナカリ  
セハ焉ソ今日ノ此成功ヲ奏スルヲ得ニヤ一  
念此ニ至テハ先以  
今上陛下ノ睿聖ヲ頌ミ次ニ閣下等ノ

偉勲ヲ頌セサルヲ得ス國家ノ為茲ニ祝  
詞ヲ奉スル所以ナリ實ニ閣下等創設ノ錢  
道今方サニ其後ヲ告ケタリ茲ニ其布設始  
末ノ概畧ヲ叙述セサルヲ得ス御記臆ニ存  
スルヤ否前條ノ廟謨ヲ實地ニ施行セラレ  
タルハ東京横濱間并神戸大坂間ノ總  
路ニシテ明治三年ヨリ著手シ續テ大坂  
京都ノ布設ヲ令セラレシハ六年ナリキ勝不  
肖職ヲ錢道ニ奉セシハ工部省創建以  
來ニシテ只誠實盡力以テ錢道宏謨ノ一  
日モ速ニ成功シ委託ニ負カサランコトヲ  
シタリ然ルニ六七年ノ頃ニ及テハ前書ノ總  
路進々後功ニ赴カントスルモ未タ接續延綿

ノ機運ニ會セス故ニ其以降數年間ノ景況  
ハ僅カニ四五十里ノ既成線路ヲ居守シテ一  
尺ノ延線モ何レノ時ニ在ルヤ知ル可ラサニ如シ之  
ヲ火ニ譬言ルニ明治ノ初年ハ枯柴ニ火ヲ點  
シ忽ニシテ焰炎天ヲ燒カントスルモ今ヤ其火  
燼滅シテ死灰ト變シ復タ燃料ノ之ニ繼  
クモノナキカ如シ當局者滿胸ノ感慨如何ナル  
ヘキヤ蓋シ此際佐賀萩臺濟西南等事  
變踵ヲ接シテ相起リ政府ハ焦眉ノ急ヲ  
救フノ邊アラサルヘク國庫モ亦タ富饒ナラサリ  
シハ固ヨリ知ラサルニ非スト雖モ世上ヲ回顧  
スレハ又一人ノ錢道事業ヲ齒牙ニ介スルモノ  
モアラサレハ職掌上不得止之ヲ政府ニ督

促スルノ外術計ナク陽ニ陰ニ其延線ノ急  
目要ナルコトヲ勸說建議スル幾回ナルヲ知ラ  
ス其終リ終ニ京都大津間延線ノ許可  
アリシハ實ニ十一年ノ四月ナリキ其線路ノ工  
事將サニ竣ラントスルヤ又請テ敷賀線ノ許  
可アリキ工事ノ緒ニ就クヤ又長濱関ヶ原間  
ニ延線センコトヲ請ヒ數回ノ苦請歳々越テ  
終ニ許可セラレ又其工事ノ竣ラントスルヤ大  
垣ニテ延線シ水運ノ便ニ接續センコトヲ懇  
請シ遂ニ其許可ヲ得シハ十六年八月ナ  
リキ如此十一年後ハ稍延線ノ方針ニ從  
フヲ得ルト雖モ共計五十哩ニ足ラサルノ線  
路ニ五六十年間ヲ消光セシモノニ其事業ハ

窮々僅ニ一錢ノ余脈ヲ絶タスト云フニ止マレリ  
而シテ勝ノ此數年間ニ於テ延總ヲ議スル為  
ノ激シテ論シ諧フテ請ヒ周旋百方聊カ心  
思ヲ焦勞セシモノハ只當初閣下等ノ翼賛  
ニ成リシ錢道廟謨ノ速ニ成功ニ至ランコトヲ  
熱望セシニ過キサリシ然ルニ機運漸ク回  
復シ十五六年ノ交ヨリ日本錢道會社ノ  
創立アリテ其工事ハ我局ノ負擔スル所トナ  
リ續テ小陸信越坂堺等ノ私設ヲ企ルモ  
ノアリテ世上漸ク錢道布設ノ急務ナルコトヲ  
論シ耳ヲ我輩ノ説ニ傾クルモノアルニ至  
リ庶議モ亦此ニ傾キ十六年末ヲ以テ中  
山道錢道布設ノ議ヲ決セラレタリ勝等

此時ノ情ヲ形容スレハ恰モ輟鮒ノ水ヲ涸タ  
ルモノト同シカルヘシ因テ一面ハ測量ニ從事シ  
一面ハ材料ヲ準備ス而シテ工事施行ノ  
順序ヲ立ルニ東西既成線路ニ續テ順次施  
工シ遂ニ中央ニ相會スルノ計畫ニ出ヅルノ  
外ナシ因テ第一署ニ西ハ大垣ノ既成線ニ接  
シテ十七年六月ヲ以テ名古屋ニ向テ起工  
シ東ハ日本錢道會社總ノ極端高崎ヲ  
以テ起點トシ十七年一月ヲ以テ碓氷ニ向テ起  
工シタリ更ニ中部建設ノ便宜ヲ計リ十  
七年十月ヲ以テ越後直江津ヨリ起工シテ  
幹線ニ上田ニ會スル枝線布設ノ議ヲ建  
テ裁可ヲ得シハ十八年三月タリ西部ハ又

中部ノ便宜ヲ計リ名古屋半田間ニ資材  
運搬線路ヲ布設セシコトヲ建議シ十八年六  
月ヲ以テ裁可ヲ得孰レモ其八月ヲ以テ起工  
シタリ如此兩端四門ヨリ起手シ工事漸ク緒  
ニ就キ將サニ中部即チ上田名古屋間ノ工  
事ニ就ントスルノ折柄此中部ノ測量全ク成  
ルヲ告ケ全體ヲ通觀スルニ其建築上ノ困  
難ト學業上ノ不利ナルト實ニ豫想外ニ  
超逸スルモノアリ依テ試ニ東海道線路ヲ以テ  
之ニ比照スルニ東海道ノ方利益最モ多キ  
コト較著タリ因テ黙過ニ忍ヒス之ヲ内閣ニ  
詳具シ遂ニ十九年七月ヲ以テ東海道ニ  
交換スルノ閣令ヲ布カレ直ニ區處シテ東

ハ横濱ヨリ西ハ大府ヨリ測量ニ建築ニ順次  
着手シタリ此ニ始メテ兩京ヲ連絡スルノ宏  
圖ヲ大成スルノ日期シテ茲ツヘト雖モ獨リ  
功ヲ一篋ニ屬クモノハ湖東ノ線路タリ故ニ  
廿年中其布設ノ急務ナルコトヲ建議シ廿  
二年一月ニ至リ布設ノ訓令ヲ領受スルヲ  
得ケ直ニ起エス外ニ廿年中横須賀線路  
布設ノ令アリ是亦二十一年一月ニ起工シタ  
リ然ルニ高寄横川間ハ十八年十月ニ竣工  
シ直江津線ハ上田ニテ廿一年八月ヲ以テ竣工  
ヲ告ケ上田輕井澤間ハ其年十一月ニ竣工  
ヲ告ク是ニ於テ該線路ハ碓氷山嶺ヲ隔テ、  
相應シ中山道錢道ノ交換ニ拘ハラス獨

立シテ東京ハ越前ノ利便ヲ達セリ而シテ名  
古屋武豊間ハ十九年ノ初ニ竣工シ大垣名古屋  
屋間及大府横濱間ト順次ニ成功シ横須  
賀總モ去月成功今又湖東總モ落成シ  
タリ故ニ其里程ヲ共計スルハ五百四十哩ノ成  
功ニ及シナリ於是廿年前閣下等翼賛ノ  
廟謨始メテ其功ヲ奏スルニミナラス數條ノ  
附帶線路ヲ増設スルヲ得タルモノナリ如斯  
二十年間ヲ費シテ五百四十哩ノ成功ヲ得  
タリトセハ固ヨリ疾足ノ進歩ト云ヲ得スト雖  
モ若シ閣下等ノ積畫ナカリセハ今日此錢  
道ノ成功ヲ見ル可ラサルヤ明ナリ且人情目  
睹ニ感動シ易キモノユヘ此官設線ハ暗ニ

今日錢道熱ノ引子トナリシヤモ知ル可ラス實  
ニ今日ハ錢道熱世間ニ蔓延セリ若シ此熱  
ノ幾分ヲ十年前ニ發スルヲ得セシメハ錢道  
ノ進歩如此邊々ニ至ラス而シテ勝等前ノ如  
ク焦慮苦心スルニモ及ハサリシナラン兔ニモ角ニ  
モ閣下等ハ日本錢道ノ開山トシテ其名錢  
道ト共ニ不朽ニ傳ハルニキハ論無キナリ勝不肖  
下風ニ立其委任ニ負カサランコトヲ誓ヒ以テ  
今日ニ及ヒタリ今創設以來勝カ管理ニ  
属シタル金額ヲ算スレハ官設ニ對シテ概計  
三千四百萬圓錢道會社ニ對シテ一千  
四百萬圓共ニ四千八百萬圓ナリ此巨大ナ  
ル金額ヲ消費シテ買得タル目下既成ノ

鐵道局

総路ヲ視レハ幸ニ皆其相當ナル價値ヲ  
有スレハ勝聊其責ヲ免ルヘシ勝ノ不敏ナ何  
ヲ以テ此大任ニ當リ斯ク失策ノ多ラサリシヤト  
云ニ至テハ之ヲ輔佐僚屬ノ功勞ニ歸セサルヲ得  
ス勝モ曾テ山谷ヲ跋涉シ指揮董督セシコト  
無キニ非ルモ多クハ屋簷ノ下ニ在テ措置處  
辨セシコト過キス然ルニ大小僚屬ニ至テハ山間  
海澨陬僻ノ地ニ奔走シ董工服務概ネ  
日出ヨリ日没ニ至リ事ノ急ナルニ及テヤ夜ニ  
連リ曉ニ徹シ寒暑風雨ヲ冒侵シテ各自  
ニ成功ヲ競ヒ遂ニ今日有ルヲ致セシモノナリ  
且各自ニ注意シテ經費ヲ節減シ冗出  
至ラス以テ豫算ニ乖カサルヲ得タル等ハ勝ノ

確認スル所ニ有之候得ハ其切勞ハ永ク御  
記臆ニ存サレ度ト存候扱終ニ臨レテ一齣  
附言致度ハ直江津総路ノ儀ニ有之前  
述ノ通已ニ碓氷山嶺ヲ間テ、津留殆ント  
相呼應言セントスルニ其連絡ヲ等閑ニ付スルハ  
恰モ龍ヲ畫テ睛ヲ點セサルモノニ非スヤ日曩  
日來其著手ヲ催スト雖モ于今逡巡タルハ  
將來官設鐵道處分ノ議起ルニ由ルナラ  
ンカ然レトモ工事ノ半途タルヲ以テ處分ヲ決  
スルノ支障トナルヘキ理由可無之到底連絡  
一日ヲ早フスレハ國家一日ノ利益ヲ増スコトハ  
疑フヘカラサル事故閣下等兼テノ本事ヲ以テ廟  
議ヲ翼賛セラレ急速著手相成耀致及

事ト存候幸ニ採納ヲ蒙レハ本懐ノ至ナリ先  
ハ一大紀節ニ遭遇シ聊カ祝辞ヲ表シ  
度如此ニ候謹言

明治廿二年七月六日 子爵井上勝

大隈伯殿



大隈伯殿

跡込  
所  
有  
印



